

## 中国電影大觀



# わが家の犬は世界一 (卡拉是條狗 / CALA, MY DOG!)

2005(平成17)年4月27日鑑賞(東映試写室)

監督・脚本=路學長ルー・シュエチン／製作総指揮=馮小剛フォン・シャオガン／出演=葛優グエ・ヨウ／丁嘉莉ディン・ジャリー／李濱リー・ビン／李勤勤リー・キンキン／夏雨シア・ユー  
ムズ配給／2002年中国映画／100分)

……愛犬カーラを軸として、北京に生きる庶民の姿が葛優グエ・ヨウの見事な演技によってイキイキと描かれた心温まる映画。愛犬の登録料5,000元(約7万円)は庶民には大金。1995年に実施されたペットの登録料をめぐる夫婦や父子間の溝が少しずつ……? しかしそこは馮小剛フォン・シャオガンのこと。ほんのりとしたムードの中、最後はハッピーエンドに。こんな中国映画、私は大スキ!

## 🎬 ペットの登録料は5,000元

北京では1995年5月1日から犬の飼育に関して厳重な制限が実施された。これは、犬が人を噛むことによって狂犬病が発生したり、犬のフンによる衛生上の諸問題などを理由としたもので、大型犬の飼育は厳禁。ペットとして飼える犬は体長35cm以下に限定されたうえ、その登録料は何と5,000元。こんな高額な登録料を払えるのは当然富裕層に限定されるため、こうなれば庶民にはペットを飼うことは高嶺の花! もっともチラシによれば、この映画公開後の2003年10月、この規定は一部改定され、登録料は5分の1の1,000元まで引き下げられたとのこと。そして北京では、現在42万匹ほどのペット犬が登録されているらしい……。

## 🎬 老二と玉蘭の夫婦仲は?

映画の冒頭は、玉蘭ユイランがペット犬のカーラを散歩に連れ出そうとするシーンから。エレベーターを待つ間のアパートの住人との会話と、窓から見下ろす狂犬病の騒ぎがうまく北京のペット事情を観客に理解させる導入部となっている。そして、たくさんの

犬が散歩している公園への公安の取り締まり。「登録証を持っていない犬はすべて没収！」というわけだ。玉蘭は必死で逃げたが、所詮警察官の足には勝てず遂に降参。老二が犬にばかりやさしくして自分や長男亮亮のことを真剣に考えてくれないと日頃から愚痴ってはいたものの、現実にはカーラを没収されてしまうと、さて老二にどのように説明すればいいのだろうか……？

## ❏ 老二と亮亮との父子仲は……？

一人息子の亮亮も、おやじがカーラばかり可愛がっていることは大きな不満。しかし亮亮も、いざカーラが現実には没収されたと聞くとおやじの動向が気がかり……。だって、おやじの生き甲斐がなくなってしまうえば、その影響が家族内に及ぶこと必至だから。そのため亮亮は彼なりにいろいろと策動(?)するが、それがかえって事態を混乱させることに……。

## ❏ 老二と楊麗の関係は……？

カーラの返還期限までは18時間。つまり明日の午後4時までということ。夜勤帰りの老二は、玉蘭からそう告げられた。もう時間は数時間しかない。玉蘭に対して八つ当たりしたり、ヘソクリの額を確認したり、カーラのことにはもうあきらめようと努力したり、いろいろと心の整理をしようと努力したが、所詮ムリ。

そんな老二がとった行動は、友人(?)の楊麗が持っている登録証を借りること。カーラは、楊麗が登録証を持って飼っているペット犬の子供だから、そっくりさんというわけだ。しかし、万一バレたら……？ 老二も楊麗もそう心配したが、そこはそれ、あたって砕けろ……？

玉蘭は中年おばさんそのもの(失礼……)だが、楊麗はかなりの美人……。いろいろと曰く因縁の人間関係があることはほどよく説明されているからそれを観てもらいたいが、ペット犬カーラをめぐる少しづつ明らかになっていく人間模様は面白い……。ヘタすると、老二と玉蘭の間には大バトル発生の危機も……？

## ❏ 日照権被害の補償は3,000元

2008年の北京オリンピックに向けて、北京のまちは着々と大改造中。そんな中、北京の高層マンション群は既に今や日本以上……？ ところで、中国の山田洋次監督

と呼ばれる馮小剛<sup>フォン・シャオガン</sup>は、庶民の生活を描くのが大得意。中国のごく平均的な工場労働者である老二<sup>ラオ</sup>が、カーラ没収後の貴重な時間の中で訪ねていったのは、そんなマンションの谷間にある胡同<sup>フートン</sup>に住んでいる母親の家。

この母親の家とその背後にそびえ立つ高層マンションのアンバランスぶりをとらえたカメラワークは実に見事！ なんとかカーラの登録料5,000元を準備できないかと相談した時、玉蘭<sup>ユイラン</sup>が老二<sup>ラオ</sup>に話したのは、高層マンション建築による日照権被害の補償として老二<sup>ラオ</sup>の母親が3,000元をもらっているはずだということ。もっともそれは、口の達々な向かいのおばさんが、法廷闘争に持ち込んだ結果によるものだそうだ。一瞬、老二<sup>ラオ</sup>はそのお金をアテにする気持も浮かんだが……？

日本で日照権紛争が多発したのは1970年～80年代だから約20年のズレがあるが、中国でも1990年代後半以降はそういう動きが……。それにしても、ペットの登録料が5,000元で、日照権被害の補償が3,000元とは、かなりアンバランス……？

## 違法ストレスも庶民のたくましさ？

ペット犬の登録制度が実施されてもさまざまな「抜け道」を模索するのが北京の庶民の知恵……。抜け道の第1は、登録料を払わず、ヤミでペット犬を飼うことだが、それは度重なる公安の取り締まりによって、今ではなかなかムリ……。第2は、老二<sup>ラオ</sup>が楊麗<sup>ヤン</sup>の登録証を借りたように、他人（他犬？）の登録証でごまかすこと。しかし、これはバレたらヤバイ……。このように抜け道はかなり難しいのが現状……。もっとも、5,000元の登録料を支払うのなら、ヤミで安いペット犬を買ってそれで我慢という手もある。もちろんその犬がまた公安に見つかれば、それを手放したうえ、また次のペット犬を、という手だ。そして悪いヤツはいるもの。こういうニーズ（？）に応えるための人間がいる。それはヤミのペット犬売り。老二<sup>ラオ</sup>はまんまとこれに騙された挙げ句……。？

ここのストーリーの描き方のうまさはさすが馮小剛<sup>フォン・シャオガン</sup>。そして葛優<sup>グォ・ヨウ</sup>の演技力がそれにみがきをかけている。

## ペット犬の価値は？ 5,000元をどうみるか？

この映画の中では、老二<sup>ラオ</sup>と楊麗<sup>ヤン</sup>の間、あるいは老二<sup>ラオ</sup>と玉蘭<sup>ユイラン</sup>の間でペット犬の価値についてあるいは5,000元の価値をどうみるかについての「議論」が再三展開され

る。つまり、5,000円を払ってでも本当にカーラを取り戻さなければならないのかという本質的な問題が提起されるわけだ。

血統書つきでよほど高価なペット犬なら5,000円の登録料を支払ってでもこれを飼う経済的価値があるものの、そうでなければ5,000円もの登録料を支払う値打ちがないのではということだ。しかし<sup>ラオ</sup>老二に言わせると、「カーラだけが俺の気持をわかってくれる」のだから、当然お金に代えがたい存在ということになる。会社では上司に、家では女房に気を遣って生きているしがない中年男にとっては、自分に対して気を遣ってくれるのはカーラしかいないということは実に重要。そしてそうだから、ペット犬の価値の評価は難しい……？ 果たして、血統書のないカーラを5,000円の登録料を支払って取り戻す価値がホントにあるのだろうか？ これがこの映画の根源的な問いかけだ。さて、あなたの答えは……？

## 飄々とした葛優の名演技

主演の葛 <sup>グォ・ヨウ</sup> 優は私が <sup>チアン・ウェン</sup> 姜 文とともに最初に名前を覚えた中国の男性俳優。『活きる』(94年)での飄々とした演技は実にすばらしいものだったし、それは『さらば、わが愛／霸王別姫』(93年)や『キープ・クール』(97年)でも同じ。そして『ハッピー・フューネラル』(01年)もすばらしかった。本作は2002年製作のものだから、私が観た葛 <sup>グォ・ヨウ</sup> 優出演の映画では最も新しいものだが、その演技はさらにみがきがかかっている感じ。そのホントに見事な演技にはホトホト感心。

## 馮小剛と路學長

製作総指揮の馮 <sup>フォン・シャオガン</sup> 小 <sup>チャン・イーモウ</sup> 剛は日本では張 <sup>チェン・カイコー</sup> 藝 謀や陳 凱 歌ほど有名ではないが、中国では人気ナンバー1の監督（『シネマルーム5』35、276頁参照）。これに対して路 <sup>ルー・シュエチャン</sup> 學 長監督は、パンフレットによれば、「中国第6世代を代表する監督」と書かれているが、残念ながら私は全く知らなかった。それもそのはず、その監督作品は日本では公開されておらず、本作がはじめてなのだから。1964年生まれで北京電影学院監督科出身とのことだから、若手の成長株のはず。今後の作品に注目しよう。この映画で、製作総指揮の馮 <sup>フォン・シャオガン</sup> 小 <sup>ルー・シュエチャン</sup> 剛と監督の路 學 長がどんな役割分担をしているののかももちろんわからないが、私の印象では、この映画は馮 <sup>フォン・シャオガン</sup> 小 剛のカラーがすごく強く打ち出されていると思えたが……。

## 公開は七藝！

この映画は2002年に中国で公開されたものだが、日本公開は多分今回がはじめて。はっきりしているのは、こういう映画を上映しようとするのはいわゆるマイナー系、ミニシアター的な映画館だということ。大手メジャー系の大劇場は、前宣伝にタツプリと費用をかけて、ヒットまちがいなしと踏んだ作品しかロードショー公開しない。つまり、ミニシアター系劇場は、自分の危険負担のもとでいい映画、観客に観てもらいたい映画をピックアップして上映しているわけだ。

この『わが家の犬は世界一』を上映するのは、十三にある「第七藝術劇場」。地下鉄九条駅にある「シネ・ヌーヴォ」とともに私の大好きな、こだわりの映画館だ。『山の郵便配達』(99年)のような静かな大ヒットとまではいかなくとも、「中国映画ここにあり！」ということをお店の観客に示してもらいたいものだ。

## ペット犬余話

この映画を観た翌日の4月28日付朝日新聞には、「チベット犬好き 中国の富裕層」と題する興味深い記事が……。そのサブタイトルとして書かれてある、「外国犬より『国産』のプライド」「自宅と別に犬舎／世話係4人」「注目され盗難次々」や小見出しの「購入費は3,900万円」「経済成長背景に」という文章を見れば、大体の趣旨が理解できるというもの。チベット犬は大型で、ライオンの雄のように見えるものが好まれているとのこと。そして、成犬は体重100キロを超えるもので、写真を見ればホントにライオンそのもの……？

前述のようにこの映画のパンフレットには、はっきりと1995年からは都市部での大型犬の飼育は厳禁になったと書かれている。ところがこの新聞記事は、1匹百数十万円もするチベット犬を14匹も飼っている、北京市近郊にある自動車販売会社社長の駱<sup>ルオシヤン</sup>翔氏を取材したもの。こりゃ一体どうなっているの……？

2005(平成17)年4月27日記